

令和 3 年 7 月 10 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K02809

研究課題名(和文) 名詞項パラメータ化仮説の検証に基づく名詞項構造の普遍的性質の解明

研究課題名(英文) An Investigation of Universal Aspects of the Structure of Nominal Arguments based on the Verification of the Nominal Mapping Parameter Hypothesis

研究代表者

越智 正男(Ochi, Masao)

大阪大学・言語文化研究科(言語文化専攻)・教授

研究者番号：50324835

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題は名詞項が通言語的に同一の統語構造を持つか否かという学術的問いを探求するものである。特に日本語や中国語と言った類別詞言語の名詞項に焦点を当てて研究を行った。具体的には、名詞代用表現、格の交替現象、削除項からの抜き出しなどについて調査した。本研究の結果は日本語がNP言語であることを示唆するものであるが、同時にこの言語の名詞項の周縁部に何らかの機能範疇領域が(随意的に)存在する可能性も示唆する結果となった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

主語や目的語といった名詞項の統語構造が普遍的な構造を持つのか、あるいは言語間で一定の範囲内での差違が許容されているのか、という理論的問いの探求は言語理論の進展にとって大変重要なものである。本研究の成果は名詞項の統語構造が通言語的に完全に同一ではないという点において名詞項写像パラメータ仮説の示す理論的方向性を支持するものではあるが、日本語のような類別詞言語の名詞項が常に裸名詞句(bare NP)ではないという結論も併せて導き出しており、同仮説と完全に合致するものではないと言える。

研究成果の概要(英文)：This research project investigated whether or not nominal arguments have a uniform syntactic realization across languages. Our particular focus is on the nominals of classifier languages such as Japanese and Chinese. Our specific research topics included nominal pro-forms, Case alternation phenomena, and extraction out of an elided argument in classifier languages. Our overall conclusion is that Japanese is an NP-language at its core, although some of our research results also indicate that nominal arguments in this language may optionally accommodate functional layers within the nominal domain.

研究分野：統語論

キーワード：名詞句 比較統語論 類別詞 格理論 項削除

1. 研究開始当初の背景

1980年代以降の生成文法理論は言語(文法)間の違いをパラメータ設定の違いに還元してきた。このパラメータの概念は句構造の領域にも適用され、決定詞(以下D)や補文標識等の機能範疇の有無に関するパラメータ仮説(Fukui 1986, MIT thesis)が特に有名である。またChierchia(1998, NLS6)の「名詞写像パラメータ仮説」(Nominal Mapping Parameter; 以下NMP仮説)やBošković(2008, NELS 37)の「DP/NPパラメータ仮説」に代表される名詞項の統語構造のパラメータ化に関する仮説によれば、名詞項が常に決定詞句(DP)として具現化される言語(イタリア語等)、常に裸名詞句(NP)として具現化される言語(中国語や日本語等の類別詞言語)等があることになる。

2. 研究の目的

本研究課題は項の統語構造が普遍的に決定詞句(DP)であるとの仮説(Longobardi 1994, LI; Watanabe 2006, NLLT)と上述の名詞項の統語構造のパラメータ化仮説を対立軸として位置づけ、名詞項構造の本質を明らかにすることを目指すものである。日本語や中国語では単複の区分が形態素で表示される必要がない点や量化に類別詞が関与する点等、印欧語とは異なる性質を示す。その一方で中国語における複数形態素と定性の関連性(Li 1999, JEAL)や類別詞と定性の関連性(Cheng and Sybesma 1999, LI)、(ii)日本語のN'削除現象(Saito, Lin, and Murasugi 2008, JEAL)等、NP言語であると見做される言語におけるD主要部(あるいはそれと同類の機能範疇)の存在を主張する先行研究は少なくない。これらの先行研究の知見を踏まえつつ、本研究は上述の重要課題の解明に取り組むものである。

3. 研究の方法

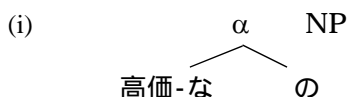
名詞項を巡る主要な統語現象をいくつか選び、日本語、中国語、英語などの名詞項の比較対照研究を行う。特に名詞代用形(nominal pro-form)の統語的認可条件、名詞項の格の交替現象の調査を通しての格付与のメカニズムの解明、削除項と移動現象の関連性を中心に研究を遂行する。その際に、海外研究協力者のC.-T. James Huang教授(ハーバード大学)やBrian Agbayani教授(カリフォルニア州立大学フレズノ校)の協力を仰ぎながら研究を進める。

4. 研究成果

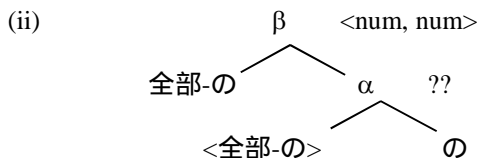
(1) 名詞代用形とラベリング理論

日本語の名詞代用形である「の」(例:高価な{本/の})の特異な振る舞いに関して統語部門における「ラベル付け」操作の観点からの分析を構築した。名詞代用形としての「の」には様々な特性があることが指摘されているが、本研究では「の」の領域に起こる修飾句に着目した。名詞代用形の「の」には修飾句等が少なくとも一つあることが必須であるが、形容詞や関係節等の修飾句とは異なり、量化句はこのような「の」の生起条件には寄与することができない(例:太郎は{高価なの/*全ての}を読んだ)。この点について大半の先行研究が量化句が占める統語的位置に基づく分析を提示しているのに対して、本研究ではそのような分析に対する反例を提示した上で、名詞代用形の「の」と共起する場合の量子句の例外的とも言える振る舞いをその「一致特性」に求めるという理論的方向性を模索した。

これは日本語の部分詞に関する近年の先行研究の知見に基づくものである。例えば、日本語の名詞句内後置型量化表現(例:本全てを読んだ)や遊離型量化表現(例:本を全て読んだ)の場合の名詞主要部(上述の例では「本」)は単数でも複数でも解釈が可能である。しかしWatanabe(2017)等で指摘されるように、名詞句内前置型(例:全ての本を読んだ)の場合の名詞主要部は常に複数として解釈される。本研究ではこれを「数の一致」現象と見做した上での分析を構築した。特に、統語的な「一致現象」を欠くと見做されがちな日本語において「一致特性」が持つ理論的意義を「ラベル付け」操作の観点から考察し、量化句と名詞との併合のラベル付けには数素性の共有が関与している旨の仮説を立てた上で、「の」句の領域における量化句の特殊な振る舞いに対する説明を試みた。以下にその概要を示す。まず、名詞代用表現の「の」は単独でラベルを提供できないとの仮定を提示した上で、Saito(2016)の提案を一部修正した形で採用した。この分析によれば、(i)では修飾句につく連体形(「な」)が反ラベル装置(anti-labeling device)として機能し、全体のラベルはNPとなる。



これに対して、(ii)においては、上述の数の一致という特性により、量化句の「全部の」が「の」の補部位置より NP 内部で移動し、いわゆる<XP,YP>の形態を作り出す。この結果、元位置にある「全部の」のコピーはラベル付け操作にとって不可視的になり、 α のラベルが決定できないためにこの構造は排除される、というのが本提案の骨子である。



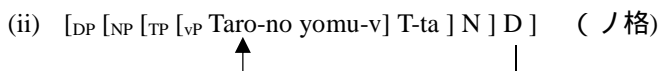
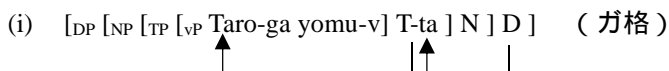
この分析の帰結の一つは、(従来の意味での)中間投射(ii)の α を生み出す際のラベルも決定されなければならないということである。

(2) 日本語の名詞項と格の交替現象

日本語における格の交替現象の包括的な研究を試みた。連体節における「主格/属格交替」(「ガ/ノ交替」)と他動詞+可能動詞「られ」の形態を持つ複合動詞を述部に持つ節における(「主格/対格交替」(「ガ/ヲ交替」))について共通の統語的メカニズムにより分析が可能であるとの方向性を模索した。以下にその詳細を述べる。

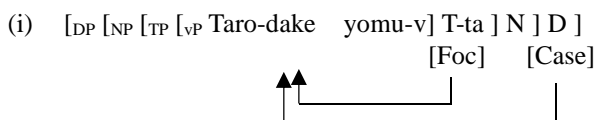
素性継承と日本語の格付与に関する研究

日本語の連体節におけるガ格/ノ格の交替現象に関する新たな仮説を構築した。これは、近年の素性継承 (Feature Inheritance) の仮説 (Chomsky 2008, Ouali 2008) を日本語の連体節に適用したものである。この分析によれば、主格 (ガ格) はもともと T 主要部の上位に位置する位相主要部 (=C 主要部) に備わる素性であり、格素性が T 主要部に継承された結果、T 主要部が主格の付与子となる。本研究では日本語の連体節が (CP 節ではなく) TP 節であるという先行研究の仮説を採用した上で、連体節におけるガ格とノ格は共にもともとは D 主要部に備わる全く同じ格素性であるとの仮説を構築した。この新たな仮説によれば、D 主要部が格素性を T 主要部に継承し、T 主要部が格の付与子となる派生においてはこの格がガ格として具現化され、D 主要部が自ら探索子となり連体節主語に格を付与する派生においてはこの格がノ格として具現化することになる。



格と焦点化

ガ格主語と異なり、ノ格主語句が焦点化と容易に相容れないという現象 (例: 太郎だけ{が/*の} 読んだ論文) に関して、非適正移動 (improper movement) の制約の観点からの分析を構築した。これは先の で述べた仮説及び焦点化素性が D 主要部より T 主要部に継承されるという仮説 (Miyagawa 2017) に基づくものである。従来の非適正移動 (improper movement) の制約によれば、項が A' 位置へ移動した後に A 位置へ移動することは許されない。本研究ではこれを素性の付与 (照合) の観点から捉え直し、同一項に対して A' 素性と A 素性の付与 (照合) が起こる場合には後者の付与 (照合) が先に起こらなければならないと提案した。焦点化素性が A' 特性を持つという点を踏まえて、以下に示す統語派生を考えると、(i) では A' 素性である焦点化素性の付与 (照合) が A 素性である格の付与の前に起きることになるため、この派生は排除される。一方、ガ格主語句の焦点化の場合には、(ii) にあるように焦点化素性とガ格が同じ T 主要部から主語名詞項に付与されることになり、上述の制約には違反しない。



(ii) [DP [NP [TP [VP Taro-dake yomu-v] T-ta] N] D]



ガ格/ヲ格交替

日本語におけるガ格とヲ格の交替現象に関する共同研究の成果を出版した。この研究は他動詞+可能動詞「られ」の形態を持つ複合動詞を述部を持つ節における格の交替と先の、の連体節におけるガ格とノ格の交替現象との平行性を捉えようとするものである。特に、「ガ格/ヲ格」交替構文におけるガ格目的語と「ガ格/ノ格」交替構文のノ格主語は共に外的併合された位置(vP内部)に留まる派生と格の認可子である主要部(前者はT主要部、後者はD主要部)の投射領域へ顕在的に移動する派生の両方があることを提案した。これは統語操作の「一致(Agree)」が日本語の名詞項の認可に深く関与していることを示唆する研究内容である。

(3) 削除現象と抜き出しに関する調査

分担者の宮本は削除現象に関する調査を担当した。特に、項削除された句からは非顕在的な移動しか認可されないとする Sakamoto (2017)の主張について再検討することを念頭に研究を遂行した。研究期間中に、(i)中国語の関係節、(ii)「数詞+類別詞」表現の分配読みが関与するデータ、(iii)日本語の左方接点繰り上げ構文、等を調査の対象とし、派生の最終段階において無音形である要素の場合には削除された項からの抜き出しが可能であるとする旨の一般化を提示した。さらに、この一般化が Saito (2007)の項削除分析と派生の循環性の考え方から導き出されると論じた。

(4) 中国語の aggressively non-D-linking wh 句に関する調査

日本語と同じく類別詞言語である中国語の wh 付加名詞句の調査を行う過程で、Chou (2012: Syntax)の分析を一部修正したものと Ochi (2014)で提案した「一致」に関する仮説と組み合わせることにより、経験的に一層妥当な分析が可能になるとの結論が得られた。これは中国語の節構造の周縁部に統語的に活動的(active)な機能範疇領域が存在するという Chou の仮説を補完するものである。この結果は中国語の統語派生においても「一致」操作が重要な役割を果たすことを示すものである。

これらの成果は本研究課題の中核の問いに対して以下のような意義をもたらす。まず、(1)で述べた名詞代用形の分析において日本語における一致現象が名詞句内に存在することを確認したが、本研究によればこの一致現象が裸名詞句(bare NP)内部で起きることになる。従って、一致現象の存在を日本語におけるDP領域の存在の証拠と見做す必要はないことになる。

次に、(2)で述べた格の交替現象の研究成果は日本語の名詞句領域の周縁部に何らかの位相主要部が存在することを示唆する。このことは日本語の名詞項がDPであるとの仮説との親和性が高いが、日本語がNP言語であり、N主要部が位相主要部である可能性を否定するものではない。ここで、本研究が肥筑方言におけるガ格/ノ格の交替現象も射程に収めることを目指している点が重要になってくる。この考え方によれば、肥筑方言においてはC主要部からT主要部への素性の継承の有無がガ格とノ格の交替現象を規定していることになり、先の連体節の交替現象と肥筑方言の交替現象の平行性を追求していくと、日本語の名詞句においてもNPの上位に何らかの機能範疇主要部が存在することになる。しかし、この位相主要部がD以外の機能範疇である可能性も残されており、日本語の名詞項がDP構造を持つという結論を支持するものとはまでは言えない。

また、(3)における中国語の調査は名詞項の上位部に何らかの機能範疇が存在するとの先行研究に基づいたものであるが、その機能範疇がDであるか否かは今後の研究においてさらなる検証が必要となる。最後に、(4)における研究成果は、中国語の統語派生において「一致」操作が重要な役割を担うという方向性を支持するものではあるが、日本語や中国語の名詞項の認可がD主要部を介するものであるかは今後さらなる研究が必要となる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 10件）

1. 著者名 Masao Ochi	4. 巻 36:2
2. 論文標題 Feature Transfer, Left Periphery, and Case Conversion (Review article of Miyagawa (2017))	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 English Linguistics	6. 最初と最後の頁 263-294
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Masao Ochi and Asuka Isono	4. 巻 16
2. 論文標題 Agree, Move and Nominative Objects in Japanese	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Nanzan Linguistics	6. 最初と最後の頁 81-106
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 Yoichi Miyamoto	4. 巻 -
2. 論文標題 A Note on Argument Ellipsis under Left Node Raising	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 言語文化共同プロジェクト2020 自然言語への理論的アプローチ	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 Masao Ochi	4. 巻 38
2. 論文標題 Feature Inheritance and Nominative-Genitive Conversion in Japanese	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Proceedings of the West Coast Conference on Formal Linguistics	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Masao Ochi	4. 巻 25
2. 論文標題 Nominative-Genitive Conversion in Japanese, Focus, and Improper Movement	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Proceedings of Western Conference in Linguistics	6. 最初と最後の頁 78-88
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Masao Ochi	4. 巻 -
2. 論文標題 Remarks on Nominative-Genitive Conversion and Indeterminate Pronoun Binding	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 言語文化共同プロジェクト2019 自然言語への理論的アプローチ	6. 最初と最後の頁 21-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Yoichi Miyamoto	4. 巻 -
2. 論文標題 A Note on Distributivity and Argument Ellipsis	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 言語文化共同プロジェクト2019 自然言語への理論的アプローチ	6. 最初と最後の頁 69-78
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Masao Ochi	4. 巻 24
2. 論文標題 Labeling Algorithm, Agreement, and Pro-form no in Japanese	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Proceedings of Western Conference in Linguistics 2018	6. 最初と最後の頁 151-161
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Masao Ochi	4. 巻 -
2. 論文標題 On Aggressively Non-D-Linking and Causal Wh-adjuncts	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 言語文化共同プロジェクト2018 自然言語への理論的アプローチ	6. 最初と最後の頁 21-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Yoichi Miyamoto	4. 巻 -
2. 論文標題 A Note on Movement out of an Ellipsis Site: A Study of Chinese Relative Clauses and N' - ellipsis	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 言語文化共同プロジェクト2018 自然言語への理論的アプローチ	6. 最初と最後の頁 79-88
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Masao Ochi	4. 巻 -
2. 論文標題 Remarks on Labels, Agreement, and Pro-form no in Japanese	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 言語文化共同プロジェクト2017 自然言語への理論的アプローチ	6. 最初と最後の頁 21-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Yoichi Miyamoto	4. 巻 -
2. 論文標題 On an Alternative to Maki et al 's (2015) Account on Mongolian NOM-GEN Alternation and its Implication for the Structure of Mongolian Relative Clauses	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 言語文化共同プロジェクト2017 自然言語への理論的アプローチ	6. 最初と最後の頁 79-88
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Masao Ochi
2. 発表標題 Nominative-Genitive Conversion in Japanese, Focus, and Improper Movement
3. 学会等名 Western Conference on Linguistics 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Masao Ochi
2. 発表標題 Feature Inheritance and Nominative-Genitive Conversion in Japanese
3. 学会等名 38th West Coast Conference in Formal Linguistics (WCCFL38) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Masao Ochi
2. 発表標題 Labeling Algorithm, Agreement, and Pro-form no in Japanese
3. 学会等名 Western Conference on Linguistics (WECOL2018) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Masao Ochi
2. 発表標題 Negative Polarity and Extended Nominal Projections in Japanese
3. 学会等名 CUHK Linguistics Seminar Series (招待講演)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 斎藤 衛、高橋大厚、瀧田健介、高橋真彦、村杉恵子、越智正男、宮本陽一	4. 発行年 2020年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 320
3. 書名 日本語研究から生成文法理論へ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	宮本 陽一 (Miyamoto Yoichi) (50301271)	大阪大学・言語文化研究科(言語文化専攻)・教授 (14401)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------